

人見ずは わが袖もちて 隠さむを

焼けつつかあらむ 着せずて来にけり

阿倍女郎(巻三・二六九)

『万葉集』の題詞によると、この歌は阿倍女郎による「屋部の坂の歌」とされています。この歌は『万葉集』の中でも難解な歌の一つと言われますが、歌中の袖をかける相手を題詞にある「屋部の坂」そのものとみて解釈する説があります。この説に従うと、歌の意は「人がもし見ていなくなったら、(屋部の坂を)私の袖で隠してあげたいけれど、(それもできないので)屋部の坂(今も焼けつつけているのだろうか。(屋部の坂に)何も着せないままで来てしまった

なあ。」となります。しかし、「坂が焼ける」とはどういうことでしょうか。

屋部の坂については、平安時代前期の史書『日本後紀』や、仏教説話集『日本書紀』に伝わる「大宮に直に向かへる山部の坂痛くな踏みそ土には有りとも」という歌にある「山部の坂」と同じ場所だと考えられています。現在の明日香村雷を含む一帯は、古代には大和高市郡夜部村にふくまれており、屋部の坂はこの村にあったとみられます。雷にほど近い橿原

やまと 万葉がたり

市上飛驒町の飛鳥川の右岸には日高山と呼ばれる小高い丘があり、藤原京の中軸道路である朱雀大路がこの丘を縦断することから、「大宮に直に向かへる山部の坂」とは、藤原京朱雀大路が日高山を越えて大宮(藤原宮)へ直進する様子を歌ったものと解されます。藤原京の造都に際し、このあたりでは朱雀大路を通すために大規模な整地工事が行われたことが発掘調査によって確認されており、工事により赤土が各所に露出していたと考えられます。また、藤原宮の正門である朱雀門に直結する道路であるため、多くの人々が行き交って路面が地肌むき出しの状態であったとも言われています。さらにもう一つ、このあたりに草木も生えない丸裸の「屋部の坂」をいとおしく思った作者が、露出する赤土を燃える炎に見立てて、このような歌を詠んだということになるでしょう。

藤原京の造都に際し、このあたりでは朱雀大路を通すために大規模な整地工事が行われたことが発掘調査によって確認されており、工事により赤土が各所に露出していたと考えられます。また、藤原宮の正門である朱雀門に直結する道路であるため、多くの人々が行き交って路面が地肌むき出しの状態であったとも言われています。さらにもう一つ、このあたりに草木も生えない丸裸の「屋部の坂」をいとおしく思った作者が、露出する赤土を燃える炎に見立てて、このような歌を詠んだということになるでしょう。

【訳】袖をかけてあなたを隠せばよかったものを、人目をばかかってそのまま来たので、今もあなたの心は燃えつつづけているだろうか。袖をかけずに来たことだなあ。

次回回は9月9日

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)